

## トピックス

## 2016年産タマネギにおけるべと病の多発生とその後の対応について

2016年は、気象条件により、通常より早い1月から越年罹病株が観察され、べと病の多発が懸念された。発生予察注意報を発表して防除に努めたが、大きな被害となった。そこで、2017年産タマネギでは取り組みを強化した結果、気象要因等もあり被害は大幅に減少した。

## 内容

2015年は秋期から高温多雨で、年明け後も春先まで高温傾向が続き、2016年1月下旬にわずかながら初発病が見られた（平年は無発生）。2月下旬には発病株率0.25%と要防除水準（0.01%）を大きく上回った（図）。3月中旬の現地調査では発生圃場率32.7%、発病株率0.45%（平年：同3.7%、同0.1%）と平年よりも多い発生であったため、3月16日に病虫害防除所が発生予察注意報を発表した。注意報を受け、JA等で講習会等を開催し、越年罹病株（写真1）抜き取り指導の徹底、一斉防除等の呼びかけ、啓発チラシの全戸配布等が実施された。二次感染が増加する4月は強風を伴う降雨日数が多かったことから再び増加し、4月下旬では発生圃場率84.8%、発病株率4.34%（平年：同3.3%、同0.25%）と多発し、さらに5月10日頃から急速に蔓延し、産地全体で大きな被害となった（写真2）。

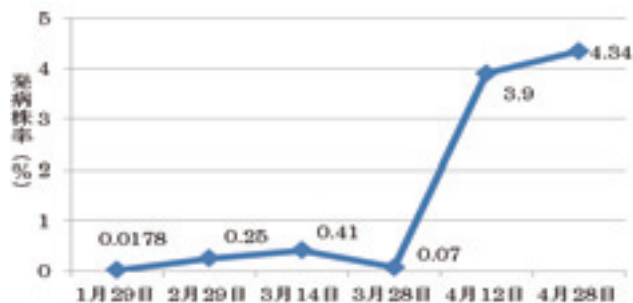


図 2016年産タマネギにおけるべと病の発生推移

この被害を受け、JA、全農兵庫、島内3市、県関係機関に加えて、県玉葱協会、農薬販売業者も加えた島内のタマネギに関連するすべての組織で構成する、淡路島たまねぎべと病対策連絡会議（事務局：県農産園芸課）が設置された。この連絡会議では、①べと病対策マニュアルの作成による指導方針の統一、②家庭菜園も含むタマネギ栽培者への啓発、③農家への啓発活動の強化、等に取り組んだ。

農家への啓発活動は、従来から行っているJA、普及センターなどの定期的な講習会や新聞折り込みチラシ・広報誌による啓発などに加えて、各種研修会、講習会を実施した。

その結果、2017年産では、2～3月が少雨であったこともあり、大きな被害はなかった。しかし、べと病菌卵胞子による圃場の汚染は続いていることから今後も警戒が必要である。

西口 真嗣（病虫害部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2448）



写真1 ベと病越年罹病株

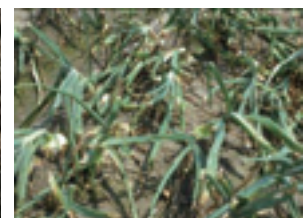


写真2 ベと病の被害